
共同研究の概要と経過

青木隆浩

1. 目的

自然認識が文化的なものであり、一見すると客観的な立場をとっている自然科学もそこから逃れられていないことが明らかにされてすでに久しい。そこには、もともと開発そのものを目的とするような、極端な開発主義に対する批判の意味が含まれていたはずである。ところが、近年ではこの主張を逆手に取り、人間の関与した「自然」や大規模な土木構造物を文化や遺産として位置づける風潮が高まっている。例えば、棚田や自然遺産の文化財登録などは自然の文化資源化であり、発電所やダムなどの建築物を近代化遺産として保護しようとする動きには、それまで負の産物とみなされていたものを「文化」という付加価値をつけることによって正当化する意味が含まれている。

また、近年の災害対策やレッドデータブックの発行を典型とする自然管理の強化においても、文化資源化の影響が見られる。例えば、砂防ダムは人間生活に融合させるという名目で文化施設化され、希少な生物や地形・湖沼は曖昧な価値付けをされて保全・管理されている。そして、それらは行政や自然科学者により、しばしば文化資源ないし観光資源として位置づけられている。

たしかに自然を人間の手で守りたいという願いや、さまざまな開発行為の歴史が人間生活を豊かにしてきたという事実は否定できないが、一方で従来近代合理主義に基づいていたはずの「自然」と「開発」に対する認識が文化主義の考え方を吸収し、それらの存在意義を曖昧にしつつ肥大化させている現状には疑問が残る。そこで、本研究会では開発と保全の歴史に関する自然科学的、社会科学的な調査報告と、それらに対する意識の変化についての人文科学的な調査報告を交え、「自然」と「環境」の文化資源化が発生した歴史的背景とそこに含まれる意義ないし問題点を明らかにしていく。

2. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表）

青木賢人	金沢大学・人間社会学域・准教授
岩佐賢史	神奈川大学附属高等学校・教諭
香川雄一	滋賀県立大学・環境科学部・専任講師
川合泰代	明治学院大学・教養教育センター・非常勤講師
神田孝治	和歌山大学・経済学部・准教授
木村周平	京都大学・東南アジア研究所・助教

才津祐美子	長崎大学・環境科学部・准教授
竹中宏子	早稲田大学・人間科学学術院・准教授
中井達郎	国士舘大学・文学部・非常勤講師
長尾朋子	東京女学館高等学校・教諭
永迫俊郎	元・鹿児島大学・法文学部・非常勤講師
廣内大助	信州大学・教育学部・准教授
松多信尚	台湾大学・地質科学系・研究員
皆川義孝	駒沢女子大学・人文学部・専任講師
室伏多門	財団法人日本システム開発研究所・研究員
○安室 知	神奈川大学・経済学部・教授
◎青木隆浩	国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

〔研究協力者〕

小野田真弓	「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会
門田岳久	東京大学大学院・総合文化研究科・大学院生
柴崎茂光	岩手大学・農学部・准教授
辻 貴弘	しらやまさん表参道振興事業協同組合
中川光熹	興雲律院・住職
堀 信行	奈良大学・文学部・教授
森脇 広	鹿児島大学・法文学部・教授
山澤 学	筑波大学・人文・文化学群・専任講師
山本理佳	青山学院女子短期大学・非常勤講師
寺田匡宏	国立民族学博物館・研究部・外来研究員

*所属は平成21年4月1日現在

3. 研究経過

〔平成17年度〕

◇第1回研究会 5月28日（土）・29日（日） 国立歴史民俗博物館

青木隆浩「農山村における文化と自然の観光資源化に関する諸問題」

青木賢人「石川県手取川の景観資源と保全運動 手取川エコミュージアム構想の紹介」

◇第2回研究会 9月23日（金）～25日（日） 鹿児島県国分市・鹿屋市・串良町・東串良町・

鹿児島市、熊本県水俣市

現地調査：上野原縄文の森、笠野原台地観音淵、柏原海岸、有村溶岩展望所、桜島国際火山砂防センター、石橋記念公園、愛林館、水俣市立水俣病資料館、水俣病情報センター、水俣病歴史考証館

香川雄一「水俣における開発の歴史と現在の環境保全」

森脇 広「南九州の自然風景」

永迫俊郎「シラス地域学」

◇第3回研究会 12月17日（土）・18日（日） 国立歴史民俗博物館

長尾朋子「洪水常襲地域における災害文化」

中井達郎「自然環境保全における文化資源化とは？」

寺田匡宏「ミュージアム展示における負の記憶」

◇第4回研究会 2月11日（土） 国立歴史民俗博物館

才津祐美子「日本の文化政策と地域文化資源化の諸相－文化遺産保護制度を中心として－」

青木隆浩「文化を売る学問の欲望とその問題について」

[平成18年度]

◇第5回研究会 6月10日（土）・11日（日） 国立歴史民俗博物館

廣内大助「水害被災地域における市民活動を通じた流域景観の保存－天白川流域における市民活動の取り組みから－」

木村周平「災害の人類学の現在：防災の社会的プロセスの研究についての試み」

皆川義孝「江戸天下祭と地域社会」

川合泰代「近世奈良町の春日講からみた聖なる山の風景」

◇第6回研究会 10月7日（土）～9日（月） 三重県伊勢市・大紀町・尾鷲市、和歌山県田辺市・新宮市

現地調査：伊勢神宮、錦タワー、賀田の津波跡、八鬼山、熊野本宮大社、熊野速玉大社、神倉神社など

神田孝治「近現代における神宮の文化資源化の過程と伊勢神宮の変容」

竹中宏子「サンティアゴ巡礼路を支える多様なアソシエーションと個人」

小野田真弓「世界遺産登録と市民運動」

松多信尚「台湾921地震、地震断層の保存と文化資源化」

◇第7回研究会 11月25日（土）・26日（日） 栃木県日光市

現地調査：輪王寺、二荒山神社、東照宮、稲荷川砂防堰堤など

山澤 学「日光の二社一寺と水害－江戸時代以降を中心に－」

中川光熹「日光の世界遺産登録とその背景」

皆川義孝「中世日光滝尾社とその活動について」

山本理佳「近代化遺産の地域的意義についての考察－北九州・佐世保両市の事例から－」

◇第8回研究会 1月20日（土）・21日（日） 国立歴史民俗博物館

安室 知「地域おこしと水田漁撈」

永迫俊郎「南九州の土地・水文環境と明治期の湿田改良」

室伏多門「市町村における地域資源活用の主体形成」

堀 信行「日本人は山に何を見てきたか：富士山の世界史から考える」

[平成19年度]

◇第9回研究会 6月2日（土）・3日（日） 国立歴史民俗博物館

中井達郎「小笠原のエコツーリズムについて～島嶼性・隔離性の資源化は可能か～」

柴崎茂光「世界遺産登録前後における地域資源管理体系・利用状況の変化－鹿児島県屋久島の事

例－」

香川雄一「工場の立地と移転にみる景観の意味づけの変化」

◇第10回研究会 7月14日（土）～16日（月） 石川県白山市・金沢市・羽咋市・輪島市

現地調査：一向一揆歴史館，白山ろく民俗資料館，百万貫岩，林西寺下山仏，白山ひめ神社，金
剣宮，兼六園，東山ひがし伝統的建造物保存地区，千里浜，気多神社，総持寺，海士町の朝市，
白米の千枚田，南志見の防災景観

辻 貴弘「白山市における世界遺産登録への推進運動について」

青木賢人「災害に対する意識・避難行動と地域環境や防災への理解，関心醸成－能登半島地震調
査・防災班の中間報告－」

◇第11回研究会 11月22日（木）～24日（土） 香川県直島町

現地調査：三菱マテリアル PLANT ツアー，家プロジェクト，本村地区屋号めぐり，直島環境
センター，有機金属リサイクル施設

青木隆浩「文化的景観の理念と現実－近江八幡市と高島市を例に－」

◇第12回研究会 3月8日（土）・9日（日） 国立歴史民俗博物館

皆川義孝「『日光の社寺』の世界遺産登録の経緯について」

松多信尚「台湾で保存される活断層」

神田孝治「熊野の観光資源化の過程とその表象」

川合泰代「世界遺産登録後に生まれた春日山練成会（登拝の会）の活動」

門田岳久「聖の商品化／商品の聖化－巡礼ツーリズムと消費社会の民俗学」

4. 研究成果

[平成17年度]

初年度の目標は，人文・自然景観の開発と保全に関する既存研究を整理するとともに，それらが文化資源化ないし観光資源化されている現場を見学することで，共同研究員共通の問題意識を探ることであった。ただし，本研究会では，研究分野間における文化と自然に対するまなざしの違いを確認する作業が必要だったので，初めから既存研究を整理して研究の方向性を定めてしまうような方法を採用せず，事例報告や現地調査を通じて，各共同研究員にみられるまなざしの違いを浮き彫りにすることにした。そして，その目的はおおよそ達成できたと実感している。

まず，第1回研究会では，青木隆浩がグリーン・ツーリズムを事例として，文化と自然の政策利用に否定的な見解を示し，一方で青木賢人氏がそれらを地域住民の手で守っていく方法として，エコミュージアムの案を提示した。

次に，鹿児島・水俣での第2回研究会では，桜島の噴火による災害の跡や防災，水俣の公害，ダムや海岸の開発，近代化遺産や棚田の保全に関する調査を通じて，地域住民や行政，医療機関などの各主体により景観の保全と開発の表象に大きな違いがあることと，それらに対する共同研究員間のまなざしにもまた大きな差異があることを確認した。また，鹿児島大学で研究報告会をおこない，永迫俊郎氏が桜島噴火による災害史とシラスの生活利用について，香川雄一氏が水俣市における公害発生と社会運動の歴史について，ゲストスピーカーの森脇広氏が南九州地方における風景の長期

的な変化について、それぞれ発表した。これらの報告により、現地調査による理解がより深まったと思われる。

第3回研究会では、長尾朋子氏が宮崎県の一山村を事例として、水害に対する住民生活の適応について、中井達郎氏が自ら自然保護に関わった経験を踏まえながら、自然保護運動の歴史的変化について、ゲストスピーカーの寺田匡宏氏が展示を目的とした災害と戦争の記憶を資源化することの問題点について、それぞれ報告をおこなった。これらの中で、中井氏から景観保全に文化としての積極的な意義を認める意見があり、それをめぐって文化資源化の問題点に関する議論が発生した。

そこで、第4回研究会では、青木隆浩が学問における文化利用の実態について、才津祐美子氏が文化財政策の歴史的経緯についてそれぞれ報告し、あらためて本研究会の課題について問題提起をおこなった。

[平成18年度]

平成17年度の研究会では、有形文化財と自然環境をおもな事例として保存と資源化の問題を取り上げたが、平成18年度はそれらと少し異なった視点から、無形文化財と災害跡地を中心的なテーマとして研究報告会と巡検を実施している。とくに、無形文化財としては世界遺産が、災害跡地としては地震、津波、水害がそれぞれ社会的影響力の大きさから共同研究員共通の関心となった。そのうち、熊野古道と日光の世界遺産化については、保存活動や登録に関わった現地の方をゲストスピーカーとして招き、ご自身の活動内容をおうかがいすることで、調査を進めていった。その他、無形の文化に関連して、江戸天下祭りが歴史的に意味を付与され、観光資源として変化していった経緯や、春日講の曼荼羅や儀礼からみた風景としての御蓋山に向けた人々のまなざしや思想について発表が行われた。

また、研究会の進め方としては、国際比較の視点も取り入れてみた。具体的にいうと、巡礼地の世界遺産については、熊野古道とスペインのサンティアゴ巡礼路、日光の社寺を、災害の保存と記憶化については、日本・台湾・トルコの地震災害を取り上げ、それぞれ比較考察している。

結果として、国際比較の視点を導入したのは良かった。これにより、無形文化の世界遺産については、保存団体の集团的枠組みと性質、行政への関わり方、行政と住民の関係、住民と旅行者の関係などに国家間の違いが認められ、それらを軸に議論を進めることが可能になった。また、災害の記憶化についても、行政がそれに積極的であるか否か、加害者である災害跡を保存するか否か、保存施設における娯楽性の有無、住民の関心度などに国家間の違いが見られた。そこで、今後は災害博物館の展示内容や災害跡を保存する経緯と目的、災害の記憶化による防災の効果などについて、国家間の比較研究を進めていくことになった。

また、熊野での巡検と研究発表によって、世界遺産化に対して関連各県の態度が大きく異なること、それに関与した民間団体の構成と活動内容、世界遺産に観光資源としての付加価値を与えている語り部集団の役割など、多くの知見が得られた。同時に、三重県は津波災害地域でもあるため、災害跡と防災施設の見学を行い、行政担当者の案内を受けることができた。この意味で熊野での研究会には二重の効果があったと考えている。

ただし、国際比較の視点を導入したことで、それまで特に意識されてこなかった景観に付加価値が与えられ、資源化される理由と経緯、それによる問題の発生原因を追うという当初の狙いがやや

弱くなり、無形文化財、災害の保存と記憶化、世界遺産化それぞれについて、より細かく具体的な点を比較考察する傾向が強まっている。このため、それぞれの対象を地域的に細かく比較したうえで、人文景観と自然景観の資源化をどのようにすり合わせていくかという問題が、新たに生じてきている。

〔平成19年度〕

平成18年度の共同研究では、世界遺産登録による景観への影響を確認することが大きな課題となり、それに関する研究発表と調査に力点を置いていたが、対象が文化遺産と複合遺産に限定されていた。そこで、最終年度は世界遺産登録の与える影響をより包括的に捉えるため、第9回研究会で世界遺産の候補地となっている小笠原諸島を事例とした中井報告、すでに登録されている屋久島を事例とした柴崎報告をもとに、自然遺産登録の景観に与える影響について討論をおこなった。また、世界遺産については登録後の影響を検討することだけでなく、登録推進運動の過程を調査することも重要な課題である。そこで、第10回研究会では、白山市の世界遺産登録推進運動を手がけている辻貴弘氏からお話をうかがうとともに、その白山市と同じく世界遺産登録を目指している金沢市で調査をおこなった。第12回研究会でも、皆川義孝氏が日光、神田孝治氏が熊野、川合泰代氏が奈良をそれぞれ事例として世界遺産登録の過程やその後の動向について報告した。

さらに、以上のような文化と自然を保護することの意義と限界は、世界遺産の問題に限られず、対象をより広くみれば観光地化やその他の地域おこしに代表されるソフト面と、開発を典型としたハード面から検討し、比較可能である。そこで、第11回研究会では、青木隆浩が文化と自然を総合的に保護するものとして注目されつつある文化的景観のソフト面とハード面における有効性について報告した。また、第12回研究会では、ゲストスピーカーの門田岳久氏が、巡礼ツーリズムによる地域への影響について報告した。

もう1つ本共同研究会で大きなテーマとなっているのが、災害と公害である。まず、文化や自然を保護する試みは、しばしば開発と緊張関係にある。しかし、文化や自然の保護は、災害や公害に対する安全を確保するための開発やそれに変わる環境対策を前提とする必要がある。これに対しては、文化や自然の保護主義に対するハード面からの考察として、第10回研究会では青木賢人氏から災害対策に関する成果を得た。

また、災害や公害はそれ自体景観を大きく変貌させるが、変貌した後の景観はしばしば負の遺産として保存される。しかし、その負の遺産は保存する側や利用者によって、例えば学術的価値のあるものとして、あるいは忘れてはいけない記憶の装置として、公共の娯楽施設としてなど、様々に解釈されている。そこから、結果として残されている景観と理想として残されようとしている景観の間に、大きな違いのあることがわかる。これに関しては、第9回研究会で公害跡地を取り上げた香川雄一氏と、第12回研究会で災害跡地を扱った松多信尚氏から成果を得た。

(国立歴史民俗博物館研究部、共同研究代表者)